



— ③ —

能登は、昭和三十年代までは、全国でも有数の人口密度が高い地域だった。浜には塩田があり、浅瀬には石垣田がある。能登を訪ねる人は、たいてい日が長いのに驚く。もっとも高い山が宝達山(六三七・一辺)だから、能登では海から日が昇り海に沈む印象で、日照時間は長い。塩もとれようというものだ。

能登の山々はなだらかで、雪が水の恵みとなって、谷奥深くまで山田を造ることができた。畦さえ造れば、山の斜面が棚田になった。また、雪解け水を吸って一気に育つ山菜にも恵まれている。もちろん

その繰り返しによってつくられる風景は、人々が求める理想景観に限りなく近づく。初めて能登をたずねた人でも、ほとんど決まったように故郷に帰ったようだとおっしゃるが、それは誰しもが抱いている、いわば、童謡に唄われているような故郷のイメージが能登にはあるのだ。

その能登国は七二八(養老二)年に成立した。二年後に立国千三百年を迎える。その長い歴史にあって一度も分断されることがなく一国体制



## 西山郷史さん

民俗学研究者

にしやま・さとし 1947年、珠洲市生まれ。69歳。

静岡大卒。大谷大学院修士課程(仏教文化)修了。県立高校教諭、珠洲市立珠洲焼資料館長など歴任。元加能民俗の会副会長。真宗大谷派西勝寺住職。同市仏教会会長。県埋蔵文化財センター評議員。日本宗教学会委員。著書に「図説 能登の歴史」(郷土出版社)など。

# 「祭りの国」深い背景

が続いた。歴史・文化面から見ても伝統が幾重にも重なっている希有な地域なのである。

名著『古代研究』によって能登のタブを日本中に知らせた折口信夫は、海のタブ、山の椿を日本の原風景ととらえた。そこには椿と白比丘尼の

関係も指摘している。能登には白比丘尼伝説の地が十三カ所も存在する。

何よりも能登、羽咋、鹿島、鳳至、珠洲といった理想郷をあらわす地名や山名があり、その面でも深い文化がある。その能登をあらわす「能登

はやさしや土までも」という有名な句がある。それを最初に紹介したのは元禄九(一六九六)年の『三日月の日記』(浅加久敬)においてであった。そこでは人のやさしやが紹介されているが、土までの通りのやさしい文化景観が育っていたのだった。

そして、月の能登と呼ぶべきだと思っほど、月がきれいなのである。月がさえ、十分な生産力があれば、月の節目に行事が行われる。キリコ、山車、獅子舞、杵旗などが登場し、仏事・節談説教などが、それこそ、至るところで営まれてきた。

華やかな行事の奥に流れている、伝説も含む深い背景や、生業との厳しい関係を知っておかなければならないだろうし、楽しい観光的視点との接点は、問い続けなければならぬだろう。

これらの行事は、収穫が前提となるだけに、生業への願い、実りの感謝・報謝を背景としており、時には厳しい生産環境を乗り越え、生きるギリギリの接点で活躍するものだった。たとえば大きな山車は、塩田をローラー代わりに引いたものだった。そのような関わりが祭りの国・能登を育てた。



かつて塩田で引かれていた山車を再現したデカ曳山(やま)＝珠洲市宝立町で